

沼津市

明治史料館通信

2009. 4. 25 (季刊 年 4 回発行) Vol. 25 No. 1 通巻第97号



静浦ホテルのラゲッジラベル
(三枝 浩氏所蔵)

静浦ホテル

昭和三十年(一九五五)八月二九日の静岡新聞に「十年ぶりで日本側へ沼津静浦ホテル」という見出しの記事が掲載された。以下に引用する。

沼津市志下の静浦ホテル(経営者清水はるさん)は終戦以来駐留軍兵の海浜保養所として使用されていたが、九月末日限り契約を解消する旨同ホテルに正式通達があり接収後丸十年ぶりで米軍の手を離れることになった。同ホテルは去る廿一年春米軍将校用の保養施設として接収され廿七年に解除はされたが引続き米軍と再契約、以来下士官の宿舎に使用されていた。建物は地上三階地下一階、廿二室で八十五名の従業員を雇っている。解放後は接収前の観光ホテルで再スタートする。

上に紹介する静浦ホテルのラゲッジラベルの作成年代は不明であるが、戦前期のものか、もしくは帝国ホテルや川奈ホテルなどで例があるように、戦後の接収中に作成されたものであろうか。

ぬまづ近代史点描 ⑥⑧

静浦ホテルの前身は、安藤正胤が静浦村志下に設立した保養館である。安藤は弘化四年（一八四七）

七月二五日、江浦村（現沼津市江浦）で小田原藩の藩医であった古谷家の二男に生まれ、後、慶応義塾に学んだ医師である。当初、保養館には敷地面積三千坪余の中に「静浦海浜院」という内科・外科の診療所も備え、今日でいうところのクアハウスとリゾートホテルを兼ねた先駆的存在であったといえよう。静浦海浜院の開院式は明治二六年（一八九三）八月六日に行われた。

同年、鳥郷に沼津御用邸も建設され、それに先立って馬込の西郷従道邸を始めとした多数の別荘、牛臥の旅館三鳥館などが建設され、また同四四年には安藤の誘致で学習院遊泳場も設置された。スコット南極探検隊の記録写真を撮ったことで知られるボンテイングが「三保の松原よりもはるかに美しい」と評した松林と遠浅の海岸とともに、静浦は全国的に保養地として知られるところとなった。また、ボンテイングは保養館を「最

高の日本旅館のひとつ」とも評している。

昭和十三年（一九三八）十月、東京市日本橋区茅場町の清水ビルディングによって静浦ホテルが建設され、保養館とともに同社が経営にあたることとなった。静浦ホテルは「本邦第一の海浜ホテル」と謳い、洋風ホテルとして建設され、保養館は静浦ホテル内の「割烹旅館」となった。

経営にあたった清水ビルディングについては現在のところ明らかではない。接収後の同二一〜二二年に改修工事を行った清水組（現清水建設株式会社）とは無関係のようである。安藤が東京で日本橋南茅場町に安藤医院を開いていたことと関係があるのかもしれない。返還時の経営者清水はる氏についても、清水組との関係は無いようだ。

〈参考文献〉上杉有「静浦海浜院 長安藤正胤の研究」（『沼津史談』No. 59、二〇〇八）、ハーバート・G・ボンテイング『英国人写真家の見た明治日本』講談社学術文庫、二〇〇五

シリーズ
沼津兵学校とその人材

87

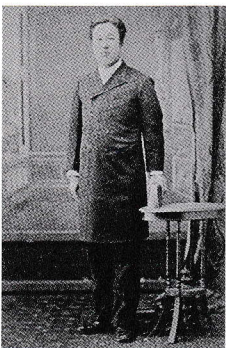
資業生芳賀行蔵の人違い

沼津兵学校の正式な生徒である資業生について、その氏名を知るためには、明治末期になって同窓生らによって作成された名簿が唯一の頼りである。雑誌『同方会誌』第四二号（大正五年刊）に掲載された石橋絢彦「沼津兵学校沿革（五）」に含まれる名簿がそれである。しかし、「尚ほ二十名計りは脱漏あるべし」と記されているように、そこに記された二一八名が実在した資業生の全員を網羅できていない可能性も高い。

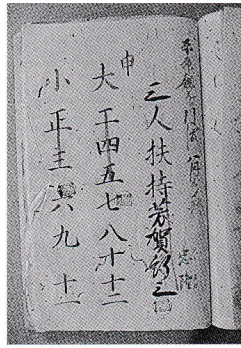
また、その二一八名の名簿には誤りも含まれているかもしれない。いや、実際に誤りがあった。第七期生細井宗八郎と第八期生細井勝文とが同一人物である可能性が高いことは以前明らかにしたことがあるし（拙著『沼津兵学校の研究』、第八期生として掲載された和多田直正が第九期生だったらしいことも指摘した（拙稿「沼津兵学校関係人物履歴集成 その三」）。そ

して、今回新たな誤りが判明した。以下にそのことを紹介してみたい。資業生の中に芳賀行蔵という人物がいた。その名前は、明治二年木版で刊行された「沼津御役人附」にも、第三期生の九番目として掲載されている。そして、前掲「沼津兵学校沿革（五）」には、編者石橋の解説として、「△芳賀勝負旧名行蔵 横浜郵便局長たりし事あり」とある。ところがこの石橋の記述は間違いだったのである。

芳賀行蔵は、慶応四年（一八六八）三月時点では撒兵差図役勤方として重兵第一大隊四番中隊に属しており、その後、移住予定の徳川家家臣の名簿「駿河表召連候家来姓名」には小筒組差図役として



飯田勇太郎と芳賀勝負
（芳賀久雄氏所蔵）



明治5年4月・第四十六区「米札渡帳上」に記された芳賀行三忠隆の名
(静岡県立中央図書館蔵)

明らかである。静岡市・蓮永寺にある飯田勝美の墓誌によれば、勝貞は故あって飯田家を離縁となり、明治一二年(一八七九)今度は芳賀家の婿養子となった。

勝貞は、明治初年静岡の美男美女番付にも載った神谷秀という女性と結婚したとされるので(坂井生「思ひ出るま、」『本道楽』第十号)、夫婦養子だったのだろう。

勝貞が次に芳賀家の養子に入った時、妻になったのは芳賀可伝という人物の未亡人であった。その芳賀可伝(鐵一郎、一八五四〜七九)は、沼津兵学校の第一期資業生であった。

その名が載った。そして明治二年(一八六九)六月には沼津兵学校資業生に及第したのである。
明治五年四月・第四十六区「米札渡帳上」(静岡県立中央図書館蔵)という史料には、三人扶持支給者として「芳賀行三」(改名後は「忠隆」という名前で記されているが、これが行蔵と同一人物であることは間違いないだろう。なぜなら、芳賀忠隆という名前の人物には、明治六年(一八七三)二五歳のとき、東京で仰観舎という洋算専門の私塾を開業したとの記録があり、その履歴部分には「明治二巳年正月ヨリ駿河国沼津駅於兵学校修業」と記されているからである(『東京教育史資料大系』第一巻、『東京府開学明細書』第二巻)。

一方、石橋が行蔵の改名後の名前であるとした芳賀勝貞なる人物は、全くの別人だった。
芳賀勝貞は、新家春三(彦次郎孝弟、一八一四〜九〇)という幕臣の次男として嘉永五年(一八五二)一月五日に生まれた。その後、講武所頭取・歩兵頭並・陸軍所修行人教授役頭取などをとめた旗本・砲術家飯田勝美(庄蔵・星泉、一八一七〜八三)の養子となり、飯田勇太郎と名乗り、慶応四年三月二三日には一七歳で慶応義塾に入社している(『慶応義塾入社帳』第一巻)。維新後は養父とともに静岡に移住し、英語の能力を買われたのであろう、静岡学問所に職を得た。明治三年(一八七〇)刊行の「静岡御役人附」には、学問所の世話心得(英学担当)として飯田勇太郎の名がある。ちなみに、「静岡御役人附」の沼津兵学校資業生の箇所には芳賀行蔵の名前があり、二人が別人であったことは明らかである。静岡市・蓮永寺にある飯田勝美の墓誌によれば、勝貞は故あって飯田家を離縁となり、明治一二年(一八七九)今度は芳賀家の婿養子となった。

その後の勝貞の履歴については、「履歴書」(芳賀久雄氏所蔵、『沼津市博物館紀要』22に翻刻)が残されており、明治七年愛知英語学校教師、九年長崎県唐津公立学校英語教諭、一二年駒通局備・横浜郵便局勤務、一六年駒通五等属、二〇年二等郵便局長、二六年大阪郵便電信局郵便課長といった、教師・官吏としての足どりが詳しく判明する。亡くなったのは明治二八年(一八九五)三月二五日だった。

勝貞が次に芳賀家の養子に入った時、妻になったのは芳賀可伝という人物の未亡人であった。その芳賀可伝(鐵一郎、一八五四〜七九)は、沼津兵学校の第一期資業生であった。

話がややこしくなるが、さらに付け加えれば、勝貞の甥、新家春正(一八五七〜一九二二、新家春三の養嗣子鉄次郎孝一の子)は沼津兵学校第九期資業生であった。石橋絢彦が「横浜郵便局長たりし事あり」と記したのは、明らかに勝貞のことである。しかし、勝貞は静岡学問所の教授だったことはあるが、沼津兵学校の資業生だったことはない。新家春正の存在なども勘違いを生む要因となり、石橋は、資業生芳賀可伝の未亡人を妻とした勝貞と、全くの別人である芳賀忠隆(行蔵・行三)とを混同してしまっただろう。

沼津市明治史料館編・刊『沼津兵学校の群像』や前掲拙著は、行蔵と勝貞とする石橋絢彦の誤解を踏襲してしまっただろう。ここで訂正させていただきます。(樋口雄彦)

お知らせ欄

◎第3回そろくまつり開催!

今年もやります!!

5月17日(日) 10時~15時

イベント

もちつき・とん汁の配布・竹細工・昔のあそび・ふさようじ作り・素六音頭・日吉太鼓演奏等

子どもたちの見た江原素六

近隣小学校で行われている「江原学習」の成果を展示

寸劇「そろく物語」

金岡小5年生有志が熱演!

上映会「沼津兵学校」

ご来館をお待ちしております。

◎平成20年度受贈資料(順不同)

◆佐藤繁様・明治大正期沼津市街地図5点◆後藤五郎様・焼夷弾

◆田辺俊一様・沼津藩土田辺家関係資料◆杉本康行様・満州出征兵士使用品◆増山温一様・松長増山家文書◆杉山淳一様・『警防団操典・警防団礼式令・警防団点検規則』◆青木由明様・沼津市消防団制服等◆野秋文雄様・沼津市消防団制服・制帽◆城内学園様・上土城内家資料◆荒熊元茂様・絵はが

き「聖駕を迎へ奉る 沼津市復興市街」◆山田茂様・東澤田外七ヶ村戸長役場文書◆島田賢憲様・昭和天皇行幸画報◆加藤昇様・陸軍軍服冬服上下1組、鉄製ヘルメット◆石井種生様・内浦村関係資料※沼津市歴史民俗資料館より移管

◎平成20年度展示等への資料貸出(順不同)

◆碧南市藤井達吉現代美術館「大浜陣屋の世界」・「沼津城絵図」「献上台」(沼津藩土杉浦家文書)など

◆社団法人日本戦災遺族会主催、於サンポートホール高松「戦争と平和展」・写真パネル「焦土と化した沼津市街地」◆静岡県東部県民生活センター主催、於パレット「沼津の空襲と戦跡」展、写真パネル「焦土と化した沼津市街地」など

◆西浦地区連合自治会「西浦地区文化祭」・興農学園関係資料など

◆西浦地区関係資料◆三島市郷土資料館「三島を襲った災害」・「関東大震災全域鳥瞰図絵」など◆大手町町内会、於大手町会館(常設・昭和26年沼津市中心商店会社案内図)◆市立沢田小学校、授業使用・写真パネル「焦土と化した沼津市

街地」◆沼津商工会議所主催「沼津今昔ギャラリー」・写真「大手町交差点」(昭和30年代) など

◎平成20年度刊行物、放送等への使用(順不同・未刊含む)

◆あしたかニュース第166号・愛鷹山絵図(日吉大嶽家文書) など

◆広報ぬまづ7月1日号・「沼津御案内」昭和9年発行・原画吉田初三郎、「末広五十三次 沼津」国輝画など◆静岡あさひテレビ「とびつきり静岡」8月14日放送、写真「焦土と化した沼津市街地」など◆静岡県立中央図書館「資料に学ぶ静岡県の歴史」・「乍恐御詔語申上候事」(口野足立家文書・寄託)

◆IVSテレビ制作株式会社・日本テレビ「ザ!鉄腕!DAS H!!」・写真「煮干し風景」「狩野川岸の魚市場」◆株式会社ニュートンプレス「Newton」2月号・写真「石橋絢彦」◆かながわ検定協議会「よこはま百問2009」・写真「大築尚志」(大築尚志関係文書)

◆テレビ朝日「スーパードチャンネル」内沼津のB級グルメとろりん紹介・写真「仲見世商店街入口夜景」「バラックが建ち始めた街

中」◆梓出版・四方一渚著「近代教育の展開と地域社会」・「沼津略画図」(旧幕臣桑山家文書)、「算訓蒙」、蔵書印「蕃書調所」(沼津文庫) ◆あいち知多農業協同組合「あぐりっ子」No.108「再発見、知多半島みるきくあるく第72回大浜」・「大浜陣屋古図」(旧沼津藩士杉浦家文書) ◆沼津史談会「沼津史談」60号・武田藤男「世古直道と三島館記」絵はがき「三島館」など、宮下義夫「車返と三枚橋」・「駿河国駿東郡沼津略図」「陸軍陸地測量部実測地図」(明治22年測量)「沼津近傍略図」(沼津案内)より・本町間宮家文書・寄託「沼津古絵図」(沼津史料)より・本町間宮家文書・寄託) ◆伊庭八郎の会「朝涼」第2号・土谷恵代著「中根淑(香亭)という人物について」中根淑使用文机、肖像(乙骨太郎乙関係文書)

沼津市明治史料館通信 第97号

編集 沼津市明治史料館

発行 沼津市西熊堂三七二一

電話 〇五五九三三三三三

FAX 〇五五九二二二〇一八

http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/meiji/index.htm